

2

文体と文末

—文章を書くうえで、知っておいた方が良い基礎的な点—

1 文体を決定する文末

日本語では、文体を決定するのは多くの場合、文末で、「です・ます調」、「だ・である調」の2つ、あるいは「です・ます調」、「である調」、「だ調」の3つにしばられる。

①です・ます調

「です・ます調」は敬体とも呼ばれる。あいさつ状や目上の人への手紙などによく用いられるのは、その表現がやわらかく、読み手に書き手の敬意が伝わりやすいからだろう。「です・ます調」は、ほかに講義・講演調の文章や、一般向けの啓蒙的な文章、さらに子ども向けの文章などによく使われる。

②である調

「である調」は、評論文や解説文などに多く使われる。学術論文などは、ほとんどが「である調」で書かれている。自分の意見を、率直に述べるのに適した文体であるといえる。特に小論文では「である調」で、自分の意見や主張を明確に述べることを勧める。

③だ調

これは「である調」とともに常体と呼ばれ、「だ調」と「である調」が混同して使われることも珍しくないし、学者によっては「だ・である調」として同一にくくっている。

「だ調」は新聞の社説や歴史書などに多く使われている。また広告のコピーなどに使われることも多く、体言止めを織りまぜながら「だ調」を使うとスピーディーな文章が表現できる。

④「です・ます調」と「である調」「だ調」の混用

作家やコラムニストなど文章の専門家には、意識的に文体を混用する人がいる。しかし一般的には、やらないほうが無難であろう。特に「です・ます調」と「である調」「だ調」の混用は、絶対にしてはいけない。

2 文体を決定する私中心と事柄中心

文体を決定するものは、文末のほかにもう1つある。それは、私を中心として書くか、事柄を中心にして書くかということである。

私中心の文は、コラムや随筆など、筆者の意見・感想を前面に出す文に向いている。一方、事柄中心の文は、論文など客観性が重視される文によく使われる。

次の2文は、大野晋『日本語の成立』から引用したものであるが、私中心と事柄中心とでの文

体の違いが分かるので、よく比較してみよう。

日本語は果たしてヨーロッパの言語のように、厳密で精確な表現の可能な言語なのだろうか。旧制の高等学校に入学して、自由に考え、読むことができるようになったとき、私の心の底でめぐっていた思いの一つは、それであった。眼前にそびえるヨーロッパの学術の壮麗さのただ中に飛び込む友人たちの中に居て、私は明らかに知りたかった。

日本はヨーロッパの持つ何を欠くが故に、ヨーロッパをこのように追いかけていかなければならないのか。日本がヨーロッパに及ばないのは何故なのか。ことによるとそれは、日本語という言語がヨーロッパのような思考と表現の厳密さや精確さにたえない言語だからではないか。

古事記の万葉仮名の使い方は、アの音には「阿」一つ、イの音には「伊」一つというように、一つの音は一つの仮名で統一するという方針で整理してある。また、一つの漢字をその意味によって訓読して使う場合にも、一字は一訓に限定しようと心懸けている。それは全面的に徹底して行いうるものではないので、結果としては例外もある。しかしおよそはその方針で貫かれている。

(大野晋『日本語の成立』)

論作文の試験では、「自分が大学で学んだことを、社会でどのように生かし、何をしたいか」といったように、「私」に即して文章を書くように指定したものが多い。また「若者の使命について」、「人間性」などのような「事柄」について述べる場合でも、「私」を出して具体的に述べると、文章も分かりやすくなり、読み手の興味もひきやすくなる。

どんな課題においても、いったん自分の側に引き込んでから書く習慣をつけておくとよい。ただ、私中心で文を書く場合には、具体的な事実を述べていかないと、主観的で一方的な文章になってしまうことに注意しなければならない。日頃から私中心の文章と事柄中心の文章とを書き分ける練習をすると文末の勉強にもなり、文体練習としては非常に効果的である。

6

重要な書き出し

—書き出しについているるな角度から検討—

1 書き出しで興味をひきつける

さて、文章全体の構成が頭の中でまとまったら、実際に書き始めるわけだが、この書き出しというのが、案外、やっかいな作業である。

ベテランの職業作家でも書き出しに苦労して、最初の1行のために、何枚もの原稿用紙を無駄にするという。職業作家にとって、何をどう書いてよいか分からないということはない。実際に筆をとった段階で、構想はほとんどまとまっていることだろう。人によっては、ほとんどすべての文章が頭の中にでき上がっていることもあるにもかかわらず、最初の1行のために、他人には想像もつかないような苦心を重ねているのである。

これは、書き出しの成否が、文章全体を左右することを知り尽くしているからだともいえる。

読み手の注意をひきつけるような書き出しには、いろいろな種類がある。そのいくつかを、箇条書きにしてみよう。

- ①感銘の深い逸話
- ②興味深い事実や出来事
- ③有名人の文章の引用
- ④自分のユニークな体験
- ⑤味わい深い名言・格言
- ⑥数字や統計の分析
- ⑦事物や人物との比較
- ⑧しゃれた文句
- ⑨意表をつく考え方・意見
- ⑩会話体の問答

まだ、ほかにいろいろな種類があるが、いずれにしてもその使い方を間違えると大変なことになる。たとえば、⑧のしゃれた文句のつもりで書き出したものの、採点者にとっては、まったくしゃれにもなっていないかったり、⑩の会話体の問答で書き出したものの、制限字数内ではまとめることができなくなったなど、日頃の練習が不足していると、思わぬ失敗作となってしまう。そのためにも、書き出しの重要性を認識して、日頃から新聞や雑誌・小説などを読んで、自分でこれかと思うような書き出しの優れた文例を書き取っておくとよい。

書き出しに、読み手の心をひきつける魅力的な言葉や、注意を喚起する何かが用意されているかどうか、その後の読み手の心理に、大きな影響を及ぼす。

800～1000字程度の論作文の場合にも、書き出しがうまくいくかどうかによって、ほとんど全体の調子が決定されてしまうことも珍しくない。

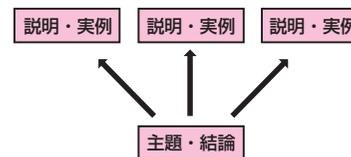
というよりも、書き出しがうまくいけば、字数の少ない短文ならば、おおむね成功したといっても過言ではない。

2 文章構成によって、書き出しも決まる

書き出しは、文章全体の構成と密接な関係を持っている。板坂元が『考える技術・書く技術』の中で、文章の書き出しとして最適なのはピラミッド型と逆ピラミッド型であると述べており、ピラミッド型にするか、あるいは逆ピラミッド型にするかによって、書き出しの調子もある程度決まってくると言える。この逆ピラミッド型は、論述文（論文や議論文）に使われることが多い。

3 逆ピラミッド型

最初に主題や結論を提示して、次に説明・補足する文章が続くのが逆ピラミッド型である。この型は、主題や結論の書き出しに始まる。



①書き出しで、結論や最も重要なことを述べる

与えられた課題に対する自分の考えなり、伝達すべき事項の中で最も重要なことを最初に述べる方法である。

当然それに続く文章は、その結論の理由なり、補足的な説明なりに費やされることになる。

これは逆ピラミッド型の文章の、最も一般的な書き出しである。逆ピラミッド型という文章構成が、時間や字数に制限のある論作文で有効であるのと同様、この書き出しも、整理された文脈を形づくるうえで、非常に有効である。

②書き出しから疑問・設問で入る

すでに上記で述べた「書き出しで、結論や最も重要なことを述べる」と同様、問題点を整理し、論述すべき内容や課題を書き出しで明らかにする。

書き手自身の問題意識や関心のある所が、読み手の側に明確に伝わるという特徴がある。